様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００００１０

研究課題名（和文）遊戯概念に定位したニーチェの道徳思想の研究

研究課題名（英文）Study of Nietzsche's moral philosophy founded on the concept of play

研究代表者
新名　隆志（Niina, Takashi）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：３０３３６０７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の基本的目的はニーチェのメタ倫理学的立場の明確化であり，「遊戯」の概念に定位してその明確化を行う解釈の可能性を探ることであった。
　本研究は計5編の学術論文およびそれに関連するシンポジウム提題や学会・研究会における発表を成果としてあげることができた。これらの成果を通して，ニーチェの遊戯概念の内実と成立過程を相当程度明らかにすることができ，また，現代のメタ倫理学や自由と責任の哲学の観点からのニーチェ道徳思想の解釈を大きく発展させることができた。さらに，ニーチェ的な遊戯の概念に即して，現代の人生の意味の哲学や反出生主義に見られる生否定の哲学などに対するニーチェ思想の意義も示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ニーチェにおける遊戯概念の重要性は周知のことだが，その重要性の内実についてはこれまで明確にされてこなかった。本研究は，行為を遊戯と捉えるニーチェの行為論が後に力への意志説として展開されることをテクストに即して明確に示した。また，この解釈において示したニーチェの遊戯の思想が，現代の人生の意味の哲学や反出生主義との対比において興味深い現代的意義をもつことも明らかにした。
　さらに本研究は，ニーチェにおける自由と責任の問題を現代の自由と責任の哲学との関係における明確化と，ニーチェの道徳的反実在論の論拠の明確化という，ニーチェ道徳思想の現代的意義に関する重要な成果をあげた。

研究成果の概要（英文）：　The basic purpose of this study was to clarify Nietzsche's meta-ethical position, and to explore the possibilities of an interpretation that would clarify this position by founding it on the concept of "play.
　This study resulted in five academic papers and related symposia and presentations at conferences and research meetings. Through these results, I was able to clarify to a considerable extent the substance and formation process of Nietzsche's concept of play, and I was also able to significantly develop the interpretation of Nietzsche's moral theory from the perspective of contemporary meta-ethics and the philosophy of freedom and responsibility. Furthermore, in line with the Nietzschean concept of play, I could also show the significance of Nietzsche's thought in the contemporary philosophy of the meaning of life and the philosophy of the denial of life as seen in anti-natalism.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：ニーチェ　遊戯　力への意志　生の肯定　人生の意味　自由意志と道徳的責任の懐疑論　道徳的反実在論　道徳の因果性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年の英語圏におけるニーチェ研究では，ニーチェの道徳思想をメタ倫理学と関連づけて理解しようとする大きな潮流がある。こうした潮流の中には，道徳的性質は実在すると考える実在論をニーチェに帰する立場もあれば，英語圏のニーチェ研究を牽引する一人である Brian Leiter のように，これを批判し，反実在論をニーチェに帰する立場もある。反実在論的解釈も多様であり，たとえば，やはり現代の代表的ニーチェ研究者の一人である Maudemarie Clark らは，道徳判断とは道徳的性質を記述するものではなく，発話者の何らかの態度表明であるとする非認知主義的な反実在論をニーチェに帰する。一方，ニーチェのメタ倫理学に関していくつもの論文を著している Nadeem J.Z. Hussain は，道徳は実在しないものの，それを虚構として利用していくべきだとする改革的虚構主義をニーチェに帰する。本場の英語圏においても，これらの諸解釈のどれがニーチェに最も適合するかという問題に焦点を合わせた議論はほとんど進展していなかった。そして日本のニーチェ研究は，こうした最新のニーチェ道徳思想研究にコミットすることすら，まだほとんどできていない状況であった。

２．研究の目的

本研究は最終的に，上記のような近年のニーチェ道徳思想研究にコミットし，ニーチェのメタ倫理学的立場の最も適切な解釈を提示することを目指す。しかし本研究の目的はそれだけではない。ニーチェは確かに，「道徳とは何か？」というメタ倫理学的問いにコミットしているが，彼の道徳思想の本質はそこにはない。彼の道徳思想が目指すのは，ニヒリズム克服と生の肯定のための「一切の価値の価値転換」である。そして，この価値転換の主張は，「力への意志」という概念に依拠して展開される。端的に言えば，ニーチェは，人間の本性である力への意志を新しい価値基準とすることにより，ニヒリズムを克服し生の肯定へと至る理想を描くのである。そして，この価値転換の思想をどう理解するかは，彼のメタ倫理学的主張の解釈に影響せざるをえない。例えば，この思想をそのまま単純に受け取るならば，彼のメタ倫理学的立場は，人間の本性（すなわち力への意志）を価値基準とするかなり素朴な自然主義的実在論に思われる。もしニーチェに反実在論を見るのであれば，このような自然主義的実在論を彼に帰すことが不適切であることを説得的に説明しなければならない。

このように，ニーチェのメタ倫理学的特徴を解釈するためにも，力への意志に依拠した価値転換とそれによるニヒリズムの克服・生の肯定とは何かという，核心的で古典的な問いを避けては通れない。本研究の最初の目的は，この問いに対して，ユニークで斬新な観点から説得力ある解釈を提示することである。この目的が達せられることにより，ニーチェのメタ倫理学的立場という問題に対しても新しい解釈視点が切り開かれる。本研究の独自性は，力への意志に依拠した価値転換の思想を解釈するにあたって，ニーチェの「遊戯」概念の分析を取り入れる点にある。この概念に定位した価値転換の解釈を提示し，さらにそれによってニーチェのメタ倫理学的立場という問題に光を投げかけ，最終的には，現代のメタ倫理学における改革的虚構主義の特徴をニーチェの道徳思想の内に捉えることが，本研究が想定するゴールである。

３．研究の方法

本研究は，これまでに研究代表者が示してきたニーチェの中心思想の解釈，特に力への意志の解釈を背景として計画されたものである。研究代表者は，自身の力への意志の解釈が，ニーチェにとって重要な概念の一つである遊戯の概念の意義を明らかにしてくれるという確かな見通しを得ていた。この見通しが正しければ，ニーチェが理想とした力への意志の価値基準に依拠する生の特徴は，ひとことで言えばまさに遊戯の生と表現できる。したがって，まずは，力への意志と遊戯に関わるテクストを精査し，この二つの中心的概念の結びつきをテクストから明確にあぶり出すことを目ざした。その成果が下に「研究成果」で示す論文①である。

次に，ニーチェ的な遊戯の生が，いかなる意味でニヒリズムを克服し生の肯定を可能にするかを，研究代表者の以前の研究成果をふまえて明確化することを目指した。ニーチェの生肯定の境地を示す永遠回帰の肯定については，すでに本研究以前に基本的な解釈を得ることができていたが，本研究では，この生肯定の理想を遊戯の概念と結びつけながらより具体的に示し，その意義と魅力を検討することを重視した。そのために本研究が試みたのは，現代の心理学的幸福学や人生の意味の哲学をニーチェの生肯定思想と対比させることであった。それによって，ニーチェの生肯定における遊戯的特徴を際立たせるとともに，その現代的な意義を明らかにすることを目指した。このような試みは，下記の論文②，③として結実した。

研究計画当初は，以上のように遊戯の概念に即してニヒリズム克服・生肯定の理想の内実を明らかにしたうえで，そこからニーチェの道徳理解に光を当て，遊戯概念に即してニーチェのメタ倫理学的立場を改革的虚構主義として示すという見通しをもっていた。この見通しは現在も失われていない。しかし，この見通しの下でニーチェ道徳思想の現代メタ倫理学的意義をできるだけ明らかにするためには，ニーチェ道徳思想解釈上のいくつかの重要な問題にまず取り組む必要と意義があると思われた。その一つは，自由意志と道徳的責任についてのニーチェの見解を明

らかにすることである。彼のテクストは，一方で自由意志と道徳的責任の強力な批判を示しながら，他方で彼の理想的な生における自由と責任の称揚も示している。ニーチェは自由と責任についてどのように考え，それは彼が理想的な生を遊戯の生と考えたこととどのように関係するのか。これは，彼が理想的な生を道徳が克服された生とも考えていたことに鑑みれば，非常に重要な問題である。それゆえ本研究は，現代の自由意志と道徳的責任の哲学の議論を参照軸として，ニーチェの自由と責任の思想の分析を試みた。その成果が下記の論文④である。

本研究が取り組んだもう一つのニーチェ道徳思想解釈上の重要問題は，ニーチェの道徳的反実在論の明確化である。本研究は，ニーチェが遊戯の生を理想とするという解釈が，彼を改革的虚構主義者と見る解釈に非常にマッチするという見通しをもっているが，道徳的虚構主義は道徳的反実在論を前提としている。「研究開始当初の背景」で述べたように，ニーチェに実在論を見るか反実在論を見るかはいまだ議論の余地があり，反実在論を見る解釈が優勢ではあるが，その論拠は詳細に分析されておらず不明瞭なところがある。よって，本研究では，テクストの詳細な分析により，ニーチェが明らかに道徳的反実在論者であることの論拠をこれまでになく明確に示すことを試みた。その成果が下記の論文⑤である。

４．研究成果

本研究の主な成果は次の通りである。

【論文】（計 5 件）

① 新名隆志（2020 年 3 月）「遊戯としての行為――ニーチェにおける遊戯（１）」『鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）』第 71 巻，9-28 頁，単著，査読無。

② 新名隆志（2021 年 9 月）「人生の意味に関するゲーム説の提唱」『哲学論文集』第 57 輯，

③ 新名隆志（2021 年 12 月）「苦しみの価値転換によるニーチェの生肯定」『ショーペンハウアー研究』第 26 巻，21-41 頁，単著，依頼論文。

④ 新名隆志（2023 年 3 月）「ニーチェにおける自由と責任――彼はそれらの何を否定し，何を肯定したのか」『鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）』第 74 巻，79-101 頁，単著，査読無。

⑤ 新名隆志（2024 年 3 月）「ニーチェの道徳的反実在論――因果性の誤解としての道徳」『鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）』第 75 巻，19-38 頁，単著，査読無。

【シンポジウム発表】（計 2 件）

① 新名隆志（2020 年 9 月 26 日）「人生の意味に関するゲーム説の提唱」九州大学哲学会 2020 年度大会（オンライン），単独発表。

② 新名隆志（2020 年 12 月 26 日～2021 年 1 月 12 日）「苦しみ，幸福，人生の意味――苦しみの価値転換によるニーチェ的な生の肯定」日本ショーペンハウアー協会第 33 回全国大会（郵便とメールによる大会），単独発表。

論文③，④は，シンポジウム発表①，②に基づく。以下，論文①～⑤の概要を述べる。

論文①：この論文は，研究代表者のこれまでの研究成果を用い，また，ニーチェの遊戯概念をめぐる重要なテクストの分析に基づき，この概念について，次のようなこれまでにない明晰な解釈を提示するものである。

ニーチェの後期思想において，力への意志は生の活動，さらには自然界の運動一般の原理と考えられているが，このような活動の捉え方の典型は，1880 年―81 年の遺稿断片における，行為を遊戯として捉えるニーチェの行為論に見出される。力への意志説は，この行為論の発展形態として捉えることができる。

萌芽的な行為論が力への意志説へと花開く過程で決定的なインスピレーションを与えたのが，初期の論考，「ギリシア人の悲劇時代の哲学」におけるヘラクレイトス思想の解釈である。抵抗を克服する遊戯として理解できる力への意志説のモデルは，初期のニーチェがヘラクレイトス思想の内に見た戦いの遊戯と考えられる。この戦いの遊戯としての遊戯観が，『喜ばしき学問』準備期のニーチェに大きなヒントを与え，以後の力への意志説の彫琢を可能にしたのである。

論文②：この論文は，ニーチェが理想とした「遊戯」の境地についての研究代表者の解釈に基づき，人生の意味についての「ゲーム説」という新たな説を提唱し，近年の分析哲学的な人生の意味論に新しい視座を切り開くものである。

この論文はまず，20 世紀前半に，　M・シュリックがニーチェ思想にヒントを得て「自己目的的活動」に人生の意味を見出す説を唱えたことに着目する。シュリックの基本的発想は，人生における活動の目的を，活動の先ではなく活動それ自体に見るというものである。自己目的的活動は，活動それ自体に喜びを見いだす活動として広義の「遊戯」活動と見なせる。そして，遊戯的

活動における充足感や没頭状態を，現代心理学は「フロー（frow）」という概念で表現する。フローは，自らの力量に適した挑戦的課題に自発的に取り組む活動において得られる。そのフローを得られる活動の仕組みを示すのが，「ゲーム」の概念である。

この論文が提唱する「ゲーム説」とは，人生にゲームを見出し創造すること，すなわち，自己目的的活動としての遊戯を創造することによって，生きる活動それ自体に目的，すなわちその活動の意味を見出せるとする説である。この説は，人生の意味の哲学の代表的な説としての「主観説」や「客観説」に対する優位性をもつ。主観説は欲求の対象の獲得に人生の意味を見るが，活動の先にある何らかの状態を欲求の対象とする限り，人生の充実は見込めない。また典型的客観説は，特定の能力をもつ人が大きな人生の意味を得るというエリート主義に陥ってしまう。一方ゲーム説は，個人の特性・力量・状況に応じた様々な活動において，誰もが人生の意味を見出せることを示唆するのである。

論文③：この論文は，苦しみに満ちたこの世界の肯定を理想とするニーチェの生肯定思想の本質，特徴，その説得力と魅力を考察するものである。

論文の前半では，ニーチェが苦としての世界を肯定的に捉える論理を，活動それ自体に喜びを見いだすという遊戯的なあり方において捉えた。ニーチェにおいて，活動（力の発揮）としての生の快・幸福は，力を発揮する対象から抵抗を受ける苦と相即的である。したがって，苦は快に不可欠なものとして否定されないどころか，苦が大きいほど快も大きくなるとされる。これが，生においてそれ自体で否定されるべき何ものもないという生肯定思想の基本的論理である。

論文の後半では，全ての苦を肯定するというニーチェの理想の困難さに対する疑問への応答を試みた。ニーチェが想定するユーモアのような態度転換の能力は，誰しもが持ちうるものであり，原理的にはすべての苦に対応できる能力である。また，ニーチェの生肯定の理想は単純に弱者を切り捨てるわけではなく，弱者も含めて誰しもが自分の力の範囲で生の活動を喜ぶことを奨励するものである。彼はある種の自死も奨励するが，これも単純に弱者が生から去ることを奨励するものではなく，喜びの生を完成させる死としての生肯定的自死を奨励するものである。このように，ニーチェの生肯定思想は必ずしも強者のみの生肯定を掲げるものではなく，万人にとって意義と魅力を持ちうるものと思われるのである。

論文④：この論文の目的の一つは，自由主義の哲学におけるニーチェの位置づけという問題に一つの答えを与えることである。この論文では，いくつかの可能な解釈的立場を代表するものとして，K・ジームス，B・ライター，A・スネルソンの解釈を検討した。まず，最新ではあるが特殊な解釈としてスネルソンの解釈を批判したうえで，ライターとジームスの対立する解釈のそれぞれを批判的に検討し，より説得的な解釈を提示した。ニーチェを非両立論に位置づける点ではジームスではなくライターの解釈に軍配があがるが，ライターの非両立論は不適切な論拠に基づく部分があり，不明瞭な点を残している。この論文は，ニーチェが自由意志の哲学における「究極性論証」と同様の議論を提示しており，これこそが，彼を自由意志と道徳的責任の懐疑論者と解釈しうる最大の論拠であることを明らかにする。

さらにこの論文では，ニーチェがこのような懐疑論者でありながらなお肯定的に語る「責任」とは何かについて，『道徳の系譜学』 第二論文の良心論に依拠してこれまで以上に明確な解釈を提示した。この「責任」とは，自分の意志するものを意志しうるようになった自律的個人が，自分の意志するものにコミットすること，そのように自分に約束すること，このことにおいて自分の「良心」をもつことを意味する。それは賞罰責任としての道徳的責任とは全く異なり，道徳の軛を逃れた「主権的個人」において初めて可能となる，非道徳化された責任である。

論文⑤：ニーチェのメタ倫理学的立場を道徳的反実在論とする解釈は，彼の道徳論の解釈として近年有力なものの一つである。しかし，彼がこの立場をとる根拠はこれまで正確に理解されてこなかった。この論文が論証するのは，ニーチェの道徳的反実在論の根拠が，道徳的判断とは因果性についての誤解に他ならないという彼の洞察にあるということである。

ニーチェの道徳批判は，道徳の実在性の批判と道徳の価値の批判に区別される。前者の批判を最も整理した形で展開しているのが，『偶像の黄昏』である。この著作の中の一つの章「四つの大誤謬」は，道徳判断が犯す因果性に関する四つの誤謬を論じるものであり，これこそが，ニーチェの反実在論の根拠である。四つの誤謬は大きく二つのセットに分けられる。一つは，自由意志を行為の原因とする誤謬とそれに関連する誤謬であり，一つは，幸・不幸の状態を説明するものとして遡及的に善・悪という原因を空想する誤謬である。ニーチェは，すべての道徳的判断は事象の因果性についてのこのような誤謬に基づいているという洞察に基づき，一種の錯誤説を主張する。また，「四つの大誤謬」と『人間的Ｉ』・『曙光』の諸断章との内容の一致から，これらの著作を著した中期においてすでに，ニーチェがそのような反実在論の見解をもっていたことが明らかになる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 新名隆志	４．巻 75
２．論文標題 ニーチェの道徳的反実在論 ： 因果性の誤解としての道徳 19 - 38	５．発行年 2024年
３．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新名隆志	４．巻 74
２．論文標題 ニーチェにおける自由と責任 ――彼はそれらの何を否定し，何を肯定したのか	５．発行年 2023年
３．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	６．最初と最後の頁 79-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新名隆志	４．巻 57
２．論文標題 人生の意味に関するゲーム説の提唱	５．発行年 2021年
３．雑誌名 哲学論文集	６．最初と最後の頁 49-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4495891	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新名隆志	４．巻 26
２．論文標題 苦しみの価値転換によるニーチェの生肯定	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ショーペンハウアー研究	６．最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新名隆志	4．巻 71
2．論文標題 遊戯としての行為――ニーチェにおける遊戯（1）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）	6．最初と最後の頁 9-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　7件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 新名隆志（レスポンデントとして）
2．発表標題 論文合評会：新名隆志「ニーチェにおける自由と責任――彼はそれらの何を否定し，何を肯定したのか」（『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・ 社会科学編』74巻、2023年 所収）
3．学会等名 日本ショーペンハウアー協会第40回ニーチェ・セミナー（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 新名隆志（論評者として）
2．発表標題 論文合評会：須藤訓任氏「等しきものの永劫回帰――ニーチェ『ツァラトゥストラ』第三部再読（上／下）」（『思想』，2022年3月号（第1175号），59~74頁／４月号（1176号），105~134頁）
3．学会等名 ニーチェ研究者の集い　関西ニーチェ研究会　共催（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 新名隆志
2．発表標題 ゲームプレイとしての人生の意味
3．学会等名 玉川大学学術研究所人文科学研究センター2021年度第1回公開研究会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 新名隆志
２．発表標題 ニーチェの自死論と安楽死
３．学会等名 鹿児島哲学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡村俊史・竹内綱史・新名隆志（レスポンデントとして）
２．発表標題 研究書合評会：「B・レジンスター『生の肯定―ニーチェによるニヒリズムの克服』（岡村俊史・竹内綱史・新名隆志訳、法政大学出版局）」
３．学会等名 日本ショーペンハウアー協会第34回ニーチェ・セミナー（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 新名隆志
２．発表標題 人生の意味に関するゲーム説の提唱
３．学会等名 九州大学哲学会2020年度大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 新名隆志
２．発表標題 苦しみ，幸福，人生の意味――苦しみの価値転換によるニーチェ的な生の肯定
３．学会等名 日本ショーペンハウアー協会第33回全国大会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Bernard Reginster （訳： 岡村 俊史，竹内 綱史，新名 隆志）	４．発行年 2020年
２．出版社 法政大学出版局	５．総ページ数 528
３．書名 生の肯定：ニーチェによるニヒリズムの克服	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関